

# 主なプログラムの装備・安全面

## 緊急時の対応について(共通)

- 統括の指示に基づいた組織的な連携、行動
    - ・状況確認し、関係機関へ連絡(警察、消防等)
    - ・現場運営スタッフに確認後、本部、連絡担当者、各家庭に連絡
- ※事業前に緊急時の対応チャート図を作成し、運営スタッフ及び各家庭への周知



## 登山 白山(標高2,702m)山小屋1泊2日

### ■ 装備

#### 【個人装備】

- ・ひさしのある帽子
- ・防寒着
- ・厚手の靴下
- ・雨具(セパレートタイプ)
- ・行動食
- ・動きやすい長袖、長ズボン(速乾性のあるもの)
- ・水分(500mLペットボトル3本)
- ・手袋(軍手やグローブ)
- ・はき慣れた底が厚い靴
- ・パッキング(ジップロック等)
- ・汗ふきシート等衛生用品
- ・デイバック及びザックカバー

#### 【団体装備】

- ・地図、コンパス
- ・登山用ポール 18本
- ・熊鈴 18個
- ・ガムテープ 3ロール
- ・携帯電話および無線 7台
- ・パルスオキシメーター(血中酸素濃度測定器) 1台
- ・装備補修材料(結束バンド等)
- ・プラティバス 3本
- ・ヘッドランプ 18個
- ・救急セット 3セット
- ・目印テープ

### 《安全面》

- ・天候の確認(携帯電話・山小屋にて情報収集)
- ・白山に精通した公立施設職員及び石川高専ワンダーフォーゲル部、看護師に同行依頼
- ・日帰り、宿泊2回の実地踏査
- ・パルスオキシメーターの数値目安として、「SpO2 90%を下回った場合下山を検討」



## サイクリング 石川県白山市から禄剛崎までの約251km

### ■ 装備

#### 【個人装備】

- ・帽子
- ・ヘルメット
- ・タオル
- ・日焼け止め
- ・活動用の服(速乾性があり、日焼けや怪我を軽減できるもの)
- ・水分(500mLペットボトル3本)
- ・デイバック及びザックカバー
- ・手袋(軍手やグローブ)
- ・サングラス
- ・サドルカバー
- ・肘当て
- ・雨具(セパレートタイプ)

#### 【団体装備】

- ・予備自転車 5台
- ・無線 7台
- ・スピードメーター 4台
- ・自転車修理用具、工具(パンク修理補修剤、空気入れ、ペンチ、六角レンチ等)
- ・水分補給用ジャグ 4台(10L)
- ・緊急車両(乗用車1台、2tトラック1台、マイクロバス1台)
- ・救急用品(救急セット、冷却スプレー、消毒剤、絆創膏、冷却用湿布等)

### 《安全面》

#### 【自転車の乗り方及び整備について】

- ・体格に合った自転車を選定
- ・走行スピードはスタッフが管理
- ・無線で本部と情報共有
- ・注意事項は最後まで確実に伝達
- ・事業前、事業中に一斉点検日を設定

#### 【休憩について】

- ・こまめに水分補給を行う
- ・休憩の種類を以下の3つに分類
  - ・大休憩……昼食等(1時間程度)
  - ・中休憩……水分補給、トイレ等(体を冷やさぬよう15分程度)
  - ・小休憩……水分補給のみ(自転車にまたがったまま5分程度)

## 成果1 一貫した自己評価を支援に生かし、子供の成長を促す

昨年度の成果と課題を生かし、主体的に生き抜く力の基礎を3つの力「かかわる力・感じる力・見つめる力」とし、子供の姿を具体的に表現した。更に、この姿を自己評価の指標とし、毎日、ふりかえりを実施した。このことにより、ふりかえりの視点が明確になるだけでなく、子供が自分自身の成長を自覚することにもつながった。

### 自己肯定感を育成するために

自己肯定感を育成するためには、自己有用感を獲得することが大切である。そのためには、他者とのかかわりが不可欠であり、「仲間と励まし合う」「友達のよいところを見つける」という自己評価を通して、仲間から自分の存在が認められたという実感を得ることが大切である。スタッフは子供の見取りを適切に行い、支援に生かしていくよう努めていく。

### 自分で考えて行動する力を育成するために

今回プログラムに取り入れた「能登島選択ルート」は、確実に子供たちの「自分で考えて行動する力の育成」につながった。しかし、それは単にそのような場を提供すればよいということではない。事前のチームでの話し合いの持ち方、事中のスタッフのかかわり方、事後のふりかえりにおける子供たちの意識の表出等、子供の思考に沿った支援をすることが大切である。

## 課題 子供たちの実態に即した「3つの力・9つの評価観点」を再度検討する

参加者の自己評価の分析から、仲間とかかわる姿と自己評価の評価点とのずれが生じる場合がある。例えば、かかわる力に「聞く」観点を盛り込むことで、「聞く・話す」の双方向的な評価ができるようにする等、見直しが必要である。3つの力の相関関係等についても分析を進め、より実効力のある評価項目を作成したい。

## 成果2 事業構想やプログラムデザインを作成し、ぶれない支援を行うことが子供の成長を促す

長期キャンプだからこそねらうことができる教育効果がある。事業構想を明確にし、プログラムデザインを作成しステージ制を設けた。活動を羅列するのではなく、それぞれのステージのねらいに沿った支援をすることにより、教育効果の高い事業にすることができた。

### 困難なことを共有する

構想の柱には「やり遂げる力」がある。一人ではできないことであっても、同じ思いを共有する仲間がいることで乗り越えることができる。また、長期に渡り、負荷を徐々に高めていくことで、子供たちにより明確な目的意識が生まれ、主体的に働きかける姿につながるができる。

### 「チーム力」を高める支援をする

6人のチームで11日間を共に過ごす過程を大切に。その過程において、スタッフは4つのステージのねらいに沿った段階的な支援を行う。6人が共に困難なことに向き合い、時には自分と他者を比較し、自分自身の生き方について考えることができた。その結果、個々の生き抜く力が育成され、さらには「チーム力」を高めることができた。

## 課題 「チーム力」を高めるためのプログラムについて見直す

この事業は、4つのステージ制を設定し、「チーム」での活動を通して「個」の生き抜く力を育成することをねらった事業である。子供たちの自己評価の分析から、「チーム」を意識するにはやや弱いプログラムがあった。よりチームの力が高まるような別のプログラムを考えるなど、今後検討が必要である。

## 成果3 保護者や担任からの評価を得ることで、事後の子供の成長を捉える

保護者と担任に対し、事前・事後のアンケートを実施した。子供たちに毎日行った振り返りカードと同一の観点で評価することで、主体的に生き抜く力の育成について、客観的な評価を得ることができた。

この結果から、キャンプを通して培った力(3つの力)が、その後の家庭生活や学校生活においても、向上していることが分かった。もちろん、10泊11日のキャンプでの経験が、子供たちの成長につながったと安易に捉えることはできない。しかし、ただ困難なことに挑戦するのではなく、明確な意味付けされたプログラムを仕組むこと、自己を見つめる振り返りの機会を継続的にもち、学びの場を充実させることなど、キャンプの趣旨に沿った支援をすることが、子供たちが成長していくきっかけとなったと言える。

## 成果4 公立施設との連携を図ることで、地域性を生かしたプログラムが展開できる

県内3公立施設と連携し、半年前から企画会議を計画的に開催した。事業の趣旨やねらいに沿ったプログラムの構築、支援体制等について議論できたことが、地域性を生かした事業の展開につながった。スタッフ全員が共通した認識で子供たちの成長を支える立場として支援に当たることは、事業の教育効果を高めるためには不可欠なことであると言える。